



2024年8月20日(火) 女性週刊誌「女性自身」に 理事長 安藤正明医師 が掲載されました

全 国 ・ 部 位 別

婦人科がん

所在地	所属	氏名	治療の特徴
北海道	札幌医科大学 大学附属病院	婦人科長 齋藤 豪	婦人科悪性腫瘍全般に取り組み、特に子宮頸がん・体がんの妊孕性温存療法に力を入れる。手術は低侵襲性手術である腔式手術の執刀例は1千例以上。子宮頸がんの妊孕性温存手術である腔式トラケクトミーは100例以上の執刀数で35例が出産に至っている。
宮城県	仙台医療 センター	産婦人科部長 副院長 新倉 仁	婦人科悪性腫瘍を専門に、手術症例数は年間約100~200例。ロボット子宮悪性腫瘍手術も250例以上を実施。患者さんのQOLに配慮した神経温存広汎子宮全摘術やセンチネルリンパ節生検などの機能温存手術やロボット手術などの低侵襲手術に積極的に取り組む。
茨城県	筑波大学 附属病院	産科・婦人科准教授 小林 佑介	婦人科がんに対して患者さんの状態に合わせて開腹手術・腹腔鏡下手術・ロボット支援下手術を選択して実施。従来の殺細胞性抗がん薬に加えてPARP阻害薬や免疫チェックポイント阻害薬などの新規治療薬も術後治療に取り入れる。さらに、遺伝リスクの高い一部の患者さんには遺伝カウンセリングや遺伝子検査も提供。
千葉県	国立がん研究 センター東病院	婦人科科長 田部 宏	卵巣・卵管・腹膜がんは、おなかの中（腹膜）へ播種性転移を認める進行期症例が多く治療法は薬物療法に合わせ手術（腫瘍減量手術）が重要。当院では全壁側腹膜切除術を取り入れ100例近く実施。肉眼的に残存腫瘍なく完全摘出できた割合が約90%と高率な実績。
神奈川県	横浜市立 大学病院	産婦人科部長 主任教授 宮城 悦子	年間子宮頸がん約100例、子宮体がん約70例、卵巣・卵管・腹膜がん約40例程度の治療を実施。進行がんは他科との共同で拡大手術、低侵襲手術（ロボット・腹腔鏡）も多数行い、臨床試験も含め最新の分子標的治療薬を含む化学治療、同時化学放射線治療に対応。
神奈川県	聖マリアンナ 医科大学病院	産婦人科学主任教授 鈴木 直	婦人科腫瘍専門医・指導医として診断から治療、状況によっては緩和医療に至るまで婦人科がんの患者第一の治療を長年実践。近年は小児・AYA世代のがん患者さんに対するがん・生殖医療（妊孕性温存療法）の啓発活動も行い、国の体制を整えるために尽力する。
静岡県	静岡県立静岡 がんセンター	婦人科部長 平嶋 泰之	婦人科浸潤がんの新規症例数は国内有数の年間約300例で、最も効果の高いとされている「標準治療」を基本方針とし、チーム医療を重視。カンファレンスで十分に検討して方針を決定。納得のいく治療のため説明を重視する。ゲノム医療を推進し臨床試験や新薬治療に積極的に参加。
山梨県	山梨県立 中央病院	婦人科部長 坂本 育子	当院は婦人科ロボット手術において全国有数の施設であり、個人で1千例以上の実績。婦人科がん全般を専門とし、遺伝子解析センターと連携して先進的な研究を行い臨床に応用。同じ女性として患者さん一人一人に丁寧な対話を通じて最適な治療の提供を心がける。
大阪府	近畿 大学病院	産婦人科主任教授 松村 謙臣	「患者本位の医療」を目指す。卵巣がんでは積極的に完全切除を行い高い治療率を達成。子宮頸がんや子宮体がんでは腹腔鏡下手術やロボット支援下手術も行う。放射線診断医や病理診断医との合同カンファレンスにより、正確な診断とエビデンスに基づき治療を行う。
岡山県	倉敷成人病 センター	理事長、ロボット先端 手術センター長 安藤 正明	がんの手術はがんだけでなくリンパ節の切除も重要。そのほとんどを腹腔鏡下手術とロボット手術で行い、輸血のない完全な切除を行っている。痛みは軽度。信頼度の高い生存率データのもと、できる限り低侵襲手術を目指す。婦人科がんの低侵襲手術は年150例。
福岡県	久留米 大学病院	産婦人科外来医長 西尾 真	治療困難な進行・再発婦人科がん（子宮頸がん、子宮体がん、卵巣がん）に対する化学療法（抗がん剤の治療）が専門。特に新規薬剤の治療開発（臨床試験、治験）に注力し、患者さんは九州全域から来院している。新規薬剤の治療症例数は常に日本のトップクラス。